

指標と評価について

文責 山野則子

<子どもの貧困のとらえ方>

金銭・物資の欠如、ヒューマン・キャピタルの欠如、ソーシャル・キャピタルの欠如の3つの欠如でとらえる。

<貧困調査の意義と指標の考え方>

子どもの実態把握 施策立案 **実践 効果** 貧困対策事業評価（指標でみる）

貧困対策事業評価に指標で確認することもありうるが（インパクト評価）、その手前のプログラム評価やプロセス評価を行う必要がある。支援者が実感持てる評価指標：必要な人を誘えているかなど（**全校児童数のなかの経済的厳しい家庭の子どもが居場所や学習支援にどれだけ参加したかの割合、朝食サービスを実施して遅刻がどれだけ減ったか、読み聞かせ活動を行って読み聞かせる親がどれだけ増えたか、高校生支援を行って10代の望まぬ妊娠が減ったかなどすべて行った地域と行っていない地域で比較**）も視野に入れる。

- ・貧困の子どもだけ抽出する必要はないが、ターゲットに届いているかどうかは重要。
- ・ターゲットの効果（3つの欠如状況がどうか変わったか）は必要 プロセス評価

注）本来はプログラムもしっかり重要な要素が入っているか点検し、プログラム自体も評価すべきであるが、各区の実情があり、多分むづかしいのが現状。

<今後>

・実態調査と事業評価をトータルに見て計画をしていかないとまったくない。トータルに見て調査デザインしていくことで、以下の4つの軸で見ることができる。

	支援前	支援後（抽出でも3年に1度実施すると支援後になる）
介入群（計画の事業利用者）		
コントロール群（無利用者）		

サンプル調査で支援実施した地域（区）とそうでない地域（区）で比較。コーホートで3年に1度同じ校区で取る、IDナンバーで同じ子どもに取る、などレベルはいろいろ考えられる。